

言葉の海のオノマトペ

清水由美

49

生活の中の表現 言葉の海のオノマトペ

「言語記号の恣意性」というものがございます。恣という字は訓読みで「ほしいまま」と読みますね。放恣な寝姿なんていう表現もあります。猫が縁側で両手両足おっぴろげ、ヘソを天に向けて大の字になっているようなのを申します。もともと猫の場合尻尾がありますから、大の字とは言えない。正確には木の字と言うべきでありましょう。そんなことはどうでもよい。言語記号の恣意性です。現代言語学の出発点を作ったとされる、スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールという方が発見しました。言語記号というのは言葉として発せられる音声のことですが、その音声と、音声によって表される意味との間には、これといって因果関係はない、両者の関係はきわめてテキトーである、実にほしいままの野放図ぶりである、という発見です。いやそれって発見ってほどのもんかい？ とはおっしゃいますな。リングが落ちるのを見たって、たいていの人は重力の発見なんかしやしません。言語記号の恣意性もまた、おおかたの凡人は言われるまで気づかなかったことだろうと思います。

10



①フェルディナン・ド・ソシュール
Ferdinand de Saussure
(八七—一九一三)。

恣(専恣) 猫(猫舌—愛猫)
尾(尾根—首尾) 凡(凡庸—非凡)
*野放図

50

たとえば尻尾を踏まれた犬はワンとかキャンとか何らかの声を出すでしょうが、そのときに彼らの使う声は「痛い！」という意味と一対一できっちり結びついていて、別々に切り離して扱うことなどできません。

対する人間はそんなとき(まあ尻尾はないので足を踏まれたとかいうとき)、日本人なら「いたい！」と叫ぶでしょうが、そのときに使うイとかタとかいう音声は、「痛い」という意味とはまるっきり関係のない、全く別の意味にも使い回すことができます。

5

「胃」とか「田」とか、「鯛」とか「板」とか、はたまた「(猫が) いた！」とか「(ここに) 居たい」とか。

音声と意味の間に何の必然性もないからこそ、人類は森羅万象、過去も未来も、真実もウソも語ることができる。そもそも、喉の奥から口先鼻先までの発声器官で作られる音の種類なんて、どんなに頑張ったところでたかが知れています。たとえば日本語ならあの五十音表に書き込めるほどのごくわずかな音の組み合わせしかないのです。もし、音と意味が分かちがたく結びついていたら、大変不自由なことになっていたでしょう。

10

かように意味から解放された音声を使って、人類はそれぞれの言語を豊かに発達させてきました。でもこのことは反面、いろんな音(の組み合わせ)と意味を、一つ一つ頭の中で結びつけながら覚えていかなければならないという事態を招きます。キャ

15

ン！ という悲鳴を聞けば、ともかく何か痛い目に遭ったらしいということを、おそらく全人類が即座に理解するでしょうが、日本語の「イタイ」という音連続を聞いても、あらかじめ意味を知っていなければ（学習していなければ）、そのような理解はできないわけです。

何の手がかりもなく、ひたすら覚えていくしかない、てんでんばらばらな言葉の渦、茫洋たる言葉の大海原。常に実体験とフィードバックしながら獲得していけばいい母語と違って、外国語学習の場合などは、つくづく道はるか、の感が身にします。

ところがこの果てしない大海に、おぼろげながらよりどころにできそうな島がある。クラゲのようなふにやふにやした輪郭だけれども、ないよりはマシ、というような島が。

オノマトペと総称される、擬音語・擬態語の一群です。オノマトペだけは、言語記号の恣意性の例外であり、音声と意味が密接に結びついています。ま、考えてみれば当たり前の話で、ことに擬音語などは、まさしく「音をまねした単語」なわけですから、いわば音即意味なのであります。

したがって、雄鶏おんどりの声は、聞こえるままに人の音声でそれをスケッチして、コケコッコーなどと言う（書く）。日本の雄鶏とイギリスの雄鶏が似たような声で鳴く以上、日本語のスケッチと英語のスケッチも似たような結果になり、英語でも（かたかなで

近い音で書けば）クツカドウドルドゥーなんて言う。カッコウなんかはさらにシンプル、さらにまねしやすい声で鳴きますから、カッコウの飛来するほとんどの国で、カッコウに似た音で言語化され、それがあの鳥の名前にもなっています。

現実の音の、言語記号による模写が行われているわけです。日本語はこのオノマトペが特別発達しています。並べてみるとちよつとおもしろい。外国人学習者も、慣れてくると日本語なりの模写の法則が本能的にわかってくるらしく、おもしろがってきます。

たとえば、コンコンとトントン、カーン！とターン！を比べると、カ行は金属でタ行は木製っぽいとか、キンとコン、チンとトンでは、イ段のほうが才段より高い音を表している感じがするとか。コロコロとゴロゴロ、パリポリとバリポリ、トンとドンでは、濁点のついたほうが大きい、重い感じがするとか。

擬態語のほうは様子を模写したもので、本来、「様子」に音なんかないはずなのですが、擬態語にも擬音語と似たような、音と意味の対応があります。「しつとり」と「じつとり」、「べたり」と「べたり」、「ふかふか」と「ぶかぶか」では、点々のついたほうが強い感じ、または不快な感じがするし、「キラキラ」より「ギラギラ」のほうが、なんだかエネルギー量が多そうな気がする。最近見かける「えっ」とか「あゝっ」なんていう表記も、この感覚を利用したものでしょう。小さな点々の有無がもたらす違

②フィードバック 結果を反映させて調整すること。
③スケッチ ここでは、音を言語の形に写し取ること。
④カッコウ カッコウ科の鳥。

※森羅万象
※たかが知れる
※身にしみる



問「この感覚」とは、どのような感覚か。



立山から見た星空

いは小さくありません。

音質だけではなく、単語の長さの意味にも、一定の対応が見てとれます。「にここ」と「につこり」、「ふらふら」と「ふらり」では、それぞれ前者が反復の、後者は一回こっきりの感じがする。「ふわり」より「ふんわり」、「チリン」より「チリーン」、「ポヨン」より「ポヨヨン」のほうがゆったり感がある、時間のかかる感じがする。発音の時間が長いことが意味に反映しているのです。それがどうしたと言われるかもしれませんが、言語という恣意的な記号体系の中で、このような対応があるのはむしろ例外です。だって「な・が・い」のほうが「み・じ・か・い」より短いじゃないですか。

と、まあオノマトペの学習は楽しみもあるのですが、なにしろ数が数ですし、言葉である以上は、恣意的なところ、つまり例外もわんさかあるわけで、たとえば「ものすごくハラハラした」からといって、「バラバラ

した」とは言えないし、いくらお星さまが明るくても、星が「ギラギラ」するのはよろしくない。

夏^{⑤たてやま}の立山に登って「星がとでもたくさんギラギラして」いて感動したという留学生の作文を読んでいて、ふと赤ペンが止まる。宇宙に放り出されたような恐怖すら感じさせる満天の星。澄みきった高山の空で、星々はたしかに不気味なほどにギラついていたのかもしれない。それにこの学生は日本のマンガが大好きで、いつも新鮮な表現をたくさん拾ってくる天才だ。うかつには直せません。傍線を引いてつーつと欄外に引っぱって、書き込む。

「キラキラ光る星はきれいですが、ギラギラ光る星はちよつと怖いです。でも怖いけど、ドキドキするくらいきれいでしょね。」



清水由美 一九五八年（昭和三三）―。

日本語教師。岐阜県生まれ。

著書に『日本人の日本語知らず。』があり、本文も同書によった。

問『な・が・い』のほうが『み・じ・か・い』より短い」とは、どういうことか。

濁（濁流―清濁）

⑤立山 北アルプスにある立山連峰の主峰。

怖（怖がる）
鮮（鮮魚―生鮮）
澄（清澄―明澄）
欄（欄干―空欄）